【320】

氏　名（本籍）	野角孝一（熊本県）（のずみ こういち）
学位の種類	博　士（芸術学）
学位記番号	博甲第 5134 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**日本画における支持体の考察** －綿布における基礎研究－

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋正彦
副　査	筑波大学教授		藤田志朗
副　査	東京学芸大学准教授	博士（文化財）	荒井　経

論文の内容の要旨

本論文は，日本画を実際に制作する者としての視点に立脚しつつ，制作法をめぐって考察を進めるものであり，作品論や作家論とは異なる研究を試みるものである。とくに中心的課題となる綿布の使用法について，収縮，裏打ち，滲みのなどその基本的な要素とともに，素材特性に配慮して，第一章と第五章において，実見した横山操の作品から自作まで具体例に論及しつつ検証を行っている。

本論文は序章，一章から五章，終章，さらに図版，参考文献等から成る。

序章においては，論文の意図と構成について述べる。

第一章では，まず綿布の使用した作例が少ないのかについて論じる。その劣化原因，線の描写に不適当な点，需要の面など，支持体としての素材特性や社会的背景に関して触れ，保存方法の問題点や，和紙や絹のような支持体と比較して使用される頻度が元来少なかった点を論じる。つぎに，綿布を日本画の支持体として使用した横山操の作例について論じ，使用した経緯，使用法などについて検証する。とくに熟覧調査においては絵具の重層方法，滲みの表れ方に着目し，作品に応じて意図的に滲みを発生させたことを論じる。つぎに油画における綿布を支持体とする制作方法を検証し，横山操と著者の作例を踏まえ，油画と日本画における制作上の特性を比較し，直張りによる綿布の固定方法についての問題点を論じる。

第二章では，綿布における下処理の方法として，まず本論における実験に使用する綿布を選択する経緯について論じ，制作者としての実践的な視点から，制作を行う前に綿布を予め収縮させる方法を検証する。刷毛を用いて水・湯を塗布する方法，水・湯の張ったバットに浸す方法を実際に行い，綿布の収縮における規則性や，異なる綿布における収縮の関係性ばかりではなく，水・湯の使用によって製織する際に塗布された糊の溶解による表出，生地における質感や皺の変化などを考慮し，日本画の制作に適した綿布における処狸方法を論じる。つぎに墨を使用した綿布におけるドーサ引きの効果について検証する。ドーサ引きを行った実例を基に，ドーサ液の種類・濃度や，生地の厚み，塗布された墨の状態などの関連性に着目し，その効果を検証する一方で，支持体となる綿布を裏側から観察し，墨の浸透状態から裏彩色や裏箔の効果が期待できる点を挙げている。

第三章では，第二章で予め収縮させた綿布を使用し，日本画の制作に適した処理について考察する。まず綿布を日本画の支持体として使用するための補強作業として，裏打ちの方法を検証する。裏打ちの方法として，和紙を使用した裏打ちの方法と，支持体となる同種の綿布を裏打ちする二通りの方法を実際に行う一方で，裏打ちを施すことに関連して綿布の収縮や皺の変化にも検証する。次に裏打ちを施した綿布に膠液を塗布し，綿布の収縮や表面の変化に着目し，実際の制作を考慮した上で，綿布に適した裏打ちの方法を考察する。つぎに支持体である綿布をパネルに固定する方法を採り上げ，著者の実践的な視点や，本論における実験結果を考慮し，制作に適した固定方法を検証する。

第四章では，絵具の塗布による綿布の特徴を考察する。ます綿布に裏彩色と裏箔を施し，絵具の塗布方法，生地の厚みによってそれぞれの効果に差異が生じるばかりではなく，綿糸によって絵具が吸収される状態が異なること，綿糸の太さが同様であっても，綿布の織られた密度によってその効果が大きくことを指摘している。つぎに岩絵具の塗布によって発生する滲みの分析から，粒子の粗い岩絵具を下地とする場合において滲みは発生せず，その他の綿布については，密度の高い綿布においてのみドーサ引きの効果が得られ，ドーサ引きの効果は生地の織られた密度に関係していると位置付けている。つぎに裏箔と裏彩色を併用した習作の分析から，絵絹を使用した場合と比較して，画面への影響は小さく，布地としての質感が強調され，柔らかい質感が得られたことに着目している。

第五章では，自作である綿布を支持体とした日本画作品の分析を行い，これまでの実験結果を作品によって確認するばかりではなく，そこからさらなる綿布における素材特性の考察を行っている。第四章において絵具の粒子や綿布の種類による滲みの発生における差異について論じたが，自作に分析により画面を立て掛けた状態と画面を床に寝かせた状態では，同じ粒子の絵具を塗布する場合においても滲みの発生に差異が見られ，前者では滲みが発生しにくいことが指摘され，ドーサ引きの効果が得られない綿布を支持体とする場合においても，絵具を塗布する方法を考慮することで，滲みの発生を制御することができると指摘している。

結章では，本論における実験結果や作品の分析をまとめ，制作者の立場から綿布という支持体を依拠した日本画における表現のさらなる可能性を示唆している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本画に限らず，作品制作に関わる研究を進めるためには，まず研究主題についての明確な意識が必要である。その点で，著者の視点は綿布における支持体としての特性と使用法に絞られており，そこから議論が展開し，実験や作品分析を通した素材特性に配慮しながら，考察がなされ，一貫した論考としてまとめられている。綿布を支持体とした日本画制作自体が未だ広く認知されておらず，制作者の立場からの作品分析も十分ではないとはいえ，著者が誠実に自らに課したテーマに取り組んでいる姿勢は高く評価できる。

考察に際しては，横山操によって制作された作品の分析ばかりではなく，綿布の収縮方法や，裏打ち方法，滲みの発生など，制作に則した検証がなされ，それぞれについて実際に実験を行い，素材特性の検証のために作例を自ら制作して用意するなど，丹念なアプローチによって議論が展開されている。その結果，結章において自作についての制作過程を客観的に検証し，それらを踏まえ，再度横山操の作品を分析し，綿布の素材特性を明確にしており，本論による考察が実際の制作に還元されることが確認された。

また，審査に際して，本論文に係る資料として作品の展示が行われており，論文の必須の資料として熟覧し，成果を確認した。

以上から，本論文は，著者ならではの実践的な視点により，日本画制作に関して独自の考察を加えた論文として高く評価できるものである。本論文により，著者の研究目的は概ね達成したといえるが，今後は他の作家による綿布を支持体とした作品をより広範に分析し，その方面での考察を深めるとともに，制作におい

ても，より一層の精進を期待するものである。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。